University
Current
Review

ISSN 0288-1748 2024（令和6）年03月20日発行［隔月刊］

［特 集］
大学のグローバル化推進の10年と今後の展望
ーSGUが大学にもたらしたものー

大学時報

NO.415
2024.03

日本私立大学連盟

だいがくのたから
Thesaurus Universitatis

東京国際大学

池袋キャンパス外観

「池袋キャンパス」

2023年9月、東京国際大学は「川越・坂戸」のキャンパス機能の一部を「池袋」に移した。4000人を収容する池袋キャンパスは、新世紀のキャンパスと称するに相応しい機能を備えている。このキャンパスには、日本人のみならず、100カ国を超える諸外国から優秀な留学生が学んでいる。

池袋キャンパスの外周には、これらの学生の出身国の旗がはためき、国際都市池袋に新たな景観をもたらしている。

池袋キャンパスの開設にともない、本来のグローバル教育機能を更に高め、世界各国から教員、研究者を招聘し、知の交流拠点、国際ブレイン・サーキュレーションの構築を目指している。

池袋キャンパスは「サンシャインシティ」に隣接し、地上22階建てで、延べ床面積は約3万5000平方メートル、JR池袋駅から徒歩12分、最寄りの東京メトロ東池袋駅からは徒歩4分のアクセスである。

本学のグローバル教育の象徴となる「TIU COMMONS」は、日本人学生と留学生とが、日常的に互いに多様な文化、価値観に触れることができる交流エリアとしての役割を担う。

低層階に日本の精神文化を象徴する茶室「公徳庵」を設えている。低木の植樹された露地の先には「和敬清寂」の空間が広がる。

東京国際大学の建学の精神は「公徳心を体した真の国際人の養成」である。

公徳の理念は、立ち位置、考え方によって認識も異なる。東京国際大学では、「公徳」の意味を、民族の相違、宗教観の類別などの視点や、価値にこだわることなく、「人間相互の和」として理解している。

キャンパス内において体験する相互に交わす挨拶もその一環である。多国籍の学生、教員、研究員、職員の混然とした集合体でありながら、大学構内に漂う緩やかな一体感が東京国際大学の特徴であると考えられる。

University Current Review

大学時報

2024.03／NO.415

CONTENTS

だいがくのたから　東京国際大学 10
大学点描　京都精華大学 14
巻頭言　私立大学と「自由自治」　澤田昌人
視点　「総合農学」の推進を目指して　江口文陽

座談会　大学におけるトイレの今どき事情ーダイバーシティの観点からー 30
加藤恵津子／山田創平／日高乃里子／松永敬子／（司会）松田美佐

特集　大学のグローバル化推進の10年と今後の展望ーSGUが大学にもたらしたものー 32
100年後も光輝く大学を目指して
ー広島大学のSGU3つの挑戦と成果ー　堀田泰司 38
「グローバル・アカデミック・ポート」の構築　中尾景子 44
世界市民教育の拠点構築へ向けてー創価大学のSGUー　田中亮平 48
世界に学び、世界に貢献する理工系人材の育成　古屋雄高 54
未来開拓力に優れた人材の育成ー明治大学における国際化の10年ー　小室輝久 60
何のための国際教育なのか？
ーCOILと国際寮の取り組みから見えたものー　山岸敬和 64

ずいそう　初等教育の現場から理事長に就任して　宮崎隆一 66

小特集　大学のスポーツ支援体制
すべては運動部学生のためにーUNIVASが進める大学スポーツ振興ー　池田敦司 68
未来創造のスポーツ共創への挑戦　山田晋三 74
地域社会との連携及び活性化への取り組み　小川隆行 80
TOYOスポーツセンターというチャレンジ　早川和宏 88

表紙：カカオ

アオギリ科の常緑樹。中南米原産で実に詰まった種子がチョコレートの主原料になります。マヤ文化圏、アステカ文化圏では古くから食用し、貨幣の代わりにも用いました。アステカ語でカカオを原料とした飲物を「チョコラトル」と言い、「チョコレート」の呼称はこれに由来します。

＊表紙デザインでは教育・成長・向上を植物になぞらえ、1年ごとにさまざまな種・葉・花・実を紹介します。今年度は実のシリーズです。

私の授業実践～教育現場の最前線から～ 94
学生とともに形づくる授業に向けて　齋藤敬之

明日への試み 96
東北学院大学地域総合学部
杜の都仙台に誕生した「知の杜」と「人の杜」　伊鹿倉正司

加盟校の幸福度ランキングアップ《マスコットキャラクター編》 98
キャラクターで結ぶコミュニティー松大みきゃんの役割と可能性―　真鍋亮

開学50周年の特別な贈り物　浮田真実子 100

Tech!Tech!理工学のその先へ！　柴田温美 102

クローズアップ・インタビュー 104
追手門学院大学共通教育機構准教授、元アーティスティックスイミング選手
巽樹理さんに聞く　（聞き手）脇浜紀子

日本私立大学連盟の提言・主張 112
令和6年能登半島地震に伴う要望

新会員代表者紹介 114
愛知大学

執筆者・出席者のご紹介（掲載順） 115

私大連ニュース 117

年間総目次 118

編集後記 124

大学点描

表現で世界を変える人を育てる

京都精華大学

京都精華大学が誕生したのは1968年。今から55年前、日本や世界の若者たちが自由を求めて声を上げ、大学は何のためにあるのか、大学の自治とは何かを問うていた時代に「自由自治」という理念を掲げ、その歩みは始まりました。

初代学長の岡本清一は、こう宣言しています。

〈われわれの大学は新しい画布のように、一切の因襲的な過去から断絶している〉

それまでの大学のあり方とは異なり、自由な気風にあふれ、だれもが平等で、おたがいを尊重しあうまったく新しい大学の創造をめざしたのです。

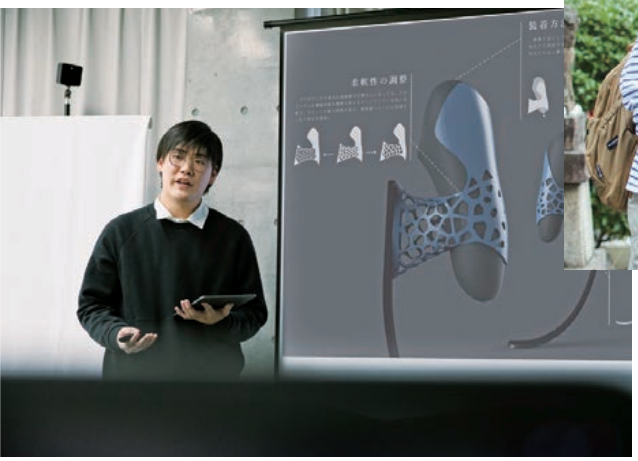
「自由であれ」という建学理念は、教育内容に、学生と教員の関係に、そして、学生たちの表現活動に、大きな影響を与えてきました。

常識や固定観念にとらわれず、広い世界や異なる分野に目を向ける。知らないことをおそれず、さまざまなことに挑戦する。表現者である自分の可能性を信じて追求し、他者にはたらきかけ、より良い世界をつくっていく。そんな学生たちが、この大学の歴史を紡いできたのです。

自由自治の大学で学んだ、自由な学生たちの表現。それは、一つの分野で評価されるだけにとどまらず、社会のありようを変え、人びとの意識を変え、やがて世界を変えていきます。

「表現で世界を変える人」を育てる——。京都精華大学がめざす、そんな大学像の根底には、半世紀以上前に掲げた「自由自治」の理念が、今もたしかに生きています。

現地で調査・研究する、社会とつながる学びを重視



京都精華大学では、国内外のあらゆる場所へ実際に足を運んで調査を行うフィールドワークや、企業、行政機関、研究機関等と連携し、社会課題を解決するプロジェクトなど、実践的な学びを重視しています。

国際文化学部では、日本／世界各地で現地を体験しながら研究します。調査地は学生自らが深めたいテーマをもとに選定。未知の場所で多様な価値観に出会い、自分を見つめなおすことが、身近な地域や文化への新たな視点の獲得につながっていきます。

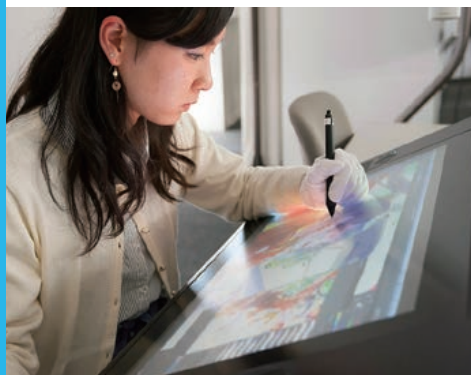
メディア表現学部では、自身の研究テーマとテクノロジーに関する技術を中心に、さまざまな企業、行政機関、研究機関等と連携し、社会課題の解決に取り組みます。そのなかでチームで協働してひとつのプロジェクトを動かす力や、社会に新しい価値を生み出すプロジェクトを立ち上げ、ビジネスとして成立させるための力を身につけます。

自分らしい表現を手にするための豊かな創作環境

約20万㎡の広いキャンパスと充実した施設・設備が特長です。芸術学部、デザイン学部、マンガ学部の実習棟にはクレーンやフォークリフトなど大型の立体作品をつくれる作業場や、鉄工室、木工室、染色工房、版画工房、写真スタジオ、液晶タブレットや3Dプリンターなどプロ仕様の施設・機材が充実しています。夜22時まで使用できる、一人ひとりに割り当てられた実習スペースは全国でもトップレベルの広さ。のびのびと制作に打ち込める環境が整っています。

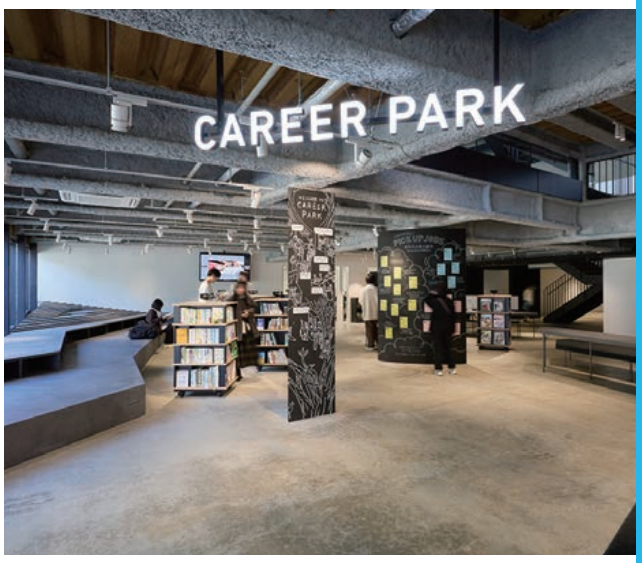
また、23万冊の蔵書に、雑誌やマンガ雑誌の最新号、映像資料まで幅広く扱う「情報館」や、約30万点のマンガ関連資料を所蔵する「京都国際マンガミュージアム」が無料で利用でき、研究や調査を支えています。

さらに、Adobe社のクリエイティブソフトや、Microsoft社のOfficeソフト等を学生はすべて無償で個人のパソコンにインストールして使用できます。ハードウェアならびにソフトウェアの両面から、学生たちの創作・学びの支援を行っています。



国際性豊かなキャンパス環境

国際交流の盛んな大学としても知られる京都精華大学。開学当初から「国際主義」を掲げ、海外とのネットワークを積極的に広げ続けています。日本でも有数の国際色豊かなキャンパスでは、在学生の約30％である1248人が外国人留学生です。さまざまな国や地域から数多くの留学生が訪れ、互いに学び合う姿がみられます。iC-Cube（Inter-Cultural Communication Commons）は、多文化交流や異文化理解のために開設された、留学生と国内学生の共同学習スペースです。英語をはじめとする各国言語の交換学習、講演会、ワークショップなどの国際交流イベントを日々開催しています。



身につけた専門性を確かな進路につなげる

卒業時に「どこに就職するか」ということよりも、ずっと先の未来を見据えて進路を選択する進路支援プログラムを用意しています。自分の好きなことや得意なことを深め、社会に展開するためのサポートは、就職活動から作家活動まで高い成果をあげています。学びをそのまま生かすケースもあれば、みずから新しい仕事をつくりだすケースまでさまざまです。

2023年には、気軽にキャリア情報やアドバイスに接することができる開放的なキャリア支援施設「キャリアパーク」を開設。学生一人ひとりに寄り添いながら、思い描く未来につなげる支援を行っています。

京都精華大学
KYOTO SEIKA UNIVERSITY

国際文化学部／メディア表現学部
芸術学部／デザイン学部／マンガ学部

〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137
TEL 075-702-5197
E-mail shingaku@kyoto-seika.ac.jp
https://www.kyoto-seika.ac.jp
X（旧twitter） @seika_sekai／@seika_shikao
Instagram @kyotoseika
Facebook @KyotoSeikaUniversity

2022年2月に新設した「明窓館」

University Current Review

大学時報

2024.03／NO.415

私立大学と「自由自治」

澤田 昌人　京都精華大学学長

本学は「自由自治」と「自立した人間の形成」を標榜し、この理念にもとづいた教育を目指している。

「自由」のために必要となるはずの「自治」とは何だろうか。それは自らをも律するルールを作ることだと思う。それが「自立」ということだろう。

チェスタトンに「ルールを持たなければ、ルーラー（支配者）を持つことになる」という言葉がある。これは私立学校の教育と運営にあてはまるだけでなく、国内外の現況にもあてはまると思う。

視点

「総合農学」の推進を目指して

江口 文陽
学校法人東京農業大学理事長・
東京農業大学学長

東京農業大学は、1891年に徳川育英会を母体として設立された。私立では最も歴史のある農学校である。学長拝命時には、6学部23学科を有する農林水産分野およびその関連領域のすべてを網羅した大学として、「総合農学」を推進していくと掲げた。

現在、北海道から沖縄の宮古島、つまりは日本列島の北から南までの各地にキャンパスとフィールド(野外実習の場)を設けている。これほどまでの広範囲に学びの場を置いている大学は他に類を見ないであろう。これらのステージでは、学生一人ひとりが主役となって、可能な限り知識や技能を修得している。本稿では、「総合農学」の推進を目指す本学の取り組みについて論じる。

「総合農学」とは、山の上から海まで、朝起きてから寝るまで、さらにはヒトが生を受けてから生涯を閉じるまでの全てを科学する幅広い学問であると私は定義している。その学問体系には自然科学や人文科学、社会科学という幅広い領域が存在する。その全てを本学は教育・研究することのできる大学なのだ。そのステージの中で、大学院生や学生には大きく羽ばたいてもらいたいと思っている。そして将来の自分のビジョン実現に向けて、勉学に励み、能力を高めていってもらいたいのである。

能力を高めるために、フィールド科学を重視した実学教育をこれまで以上に展開したいと思う。「食」に関する教育や研究を行い、その専門的な知識を活かした人材としてのみならず食品産業に関するキャリア人材となることを意識するならば、フィールドでの学びを体験することが重要であ

る。本学は、網走の寒冷地農場や水産学を学ぶオホーツク臨海研究センター、富士山の雄大な景色を一望できる富士農場、さらには伊勢原農場、棚沢圃場（ほじょう）、宮古亜熱帯農場、森林領域を学ぶ奥多摩演習林と群馬分収林などのフィールドを日本全国に整備している。これらのフィールドで学生や教職員がともに五感で物事を感じ、そこから学び得たものを活かして科学を重視した実践教育や研究を展開しているのである。これまでのフィールド科学をさらに強化した本学ならではの実学教育の展開を意識したいのだ。

本学創設者の榎本武揚学祖は、学問や研究とは、理論と実践の両輪がうまく機能するとともに社会生活と産業振興に貢献するものでなければならないと述べている。私は、そうした学問こそが農学であると説かれたと強く認識している。さらに、初代学長の横井時敬先生は、榎本武揚先生の思いを実現する為に「稲のことは稲に聞け」、「農業のことは農民に聞け」と言う名言を残した。二人の学祖を持つ本学の教職員は、学祖の思いをしっかりと心に受け止めて、学生たちに伝えていくことが肝心である。その伝承は、学内のみならず「食・農・環境」の恩恵を受けている万人へのメッセージになると考える。

先達が歴史の中で作ったそれぞれの学問業績などを大きく活かしていくことが、「総合農学」の推進を目指す本学の学長である私に与えられた使命と考える。

「総合農学」推進の実装として本学のそれぞれのキャンパスやフィールドでは、学生が農を感じる事が大切であると考えている。すなわち、大都市の世田谷キャンパス、少し農村地域とコミュニケーションのある厚木キャンパス、そして大自然の中にある北海道オホーツクキャンパスの施設に、「農ある風景」をしっかりと造成したいのである。「総合農学」を学ぶ学生がキャンパスの身近な場所から農を感じ、勉学に活かしていく事が私の理想である。現在それぞれのキャンパスでは、「農ある風景」のキャンパスの造成が学生や教職員との関わりを強く持って進められている。

世田谷キャンパスでは、スタートアップとしてシイタケの榾（ほだ）木（ぎ）、夏場においてはワグネルポット（植木鉢）に、ナス、トマト、ピーマン、トウガラシなどが植えられ、実を付け、収穫とともに食された。簡易的に設置したトレーの水田には稲が育ち、その水の中ではカエルが飛び跳ね、カエルを狙うカラスが飛来する光景が見られた。キャンパスの中における生物多様性と動物の生態が観察されたのである。大都会の世田谷キャンパスには、明治神宮の森と神奈川県の山間部とを飛び交う猛

禽類が羽を休める状況もここ2年の中で観察されている。収穫祭の時期には、棚沢圃場で収穫された稲を束ねて稲架（はざ）に掛けて、天日と風によって乾燥させる様子も演出した。多くの来学者が撮影するスポットとして利用していたことは、農大らしさの一つと言えよう。なお２０２４年1月にはキャンパス内に石組みで造成した棚田が完成し、学生や教職員による作物生産とキャンパス森の樹木の生育が始まっている。

厚木キャンパスでは、保護者の支援のもと、複数の学生と教職員の団体が花卉（かき）や野菜の栽培などを行っている。農学の魅力だけでなく、色とりどりの美しい花々など、学生や教職員、来学者の心を癒やしてくれる景色もある。なお、本学ならではの作物生産の実装として、１００本を超えるビワ、カキなどの果樹にオーナー制度を設け、在学期間手入れをすれば収穫物は自由に利用できるようにしている。授業と併せて、果実が成長する過程での病害虫対策や高品質の収穫物の生産方法を知る学びとなるはずだ。また、担当教員の指導で学生が圃場にサツマイモの苗を定植する実習には私も参加しており、就任以来の恒例実習となっている。こうした学生との実学教育をともに体験することが本学の伝統になると確信している。

北海道オホーツクキャンパスでは、キャンパスの外周に自然を楽しめる散歩道であるファイントレールがある。その活用と隣接した圃場の整備を進めている。また、２０２３年に近隣の能取湖のホタテ貝が大量死した際には、死んだホタテ貝の殻を圃場の暗渠（あんきょ）資材として活用。地域産業に貢献するとともに、持続可能な環境整備の実装を進めている（ちなみに、ホタテ貝の大量死の原因については、行政機関・地元の漁業協同組合・本学で調査中である）。

今後、各キャンパスの施設や栽培作物の管理計画も調整して、水田の稲に白い花が咲く季節の美しさに学生が気づき、水田からはカエルの合唱が聞こえるという音の風景がキャンパスに広がれば素敵ではないだろうか。

今は小さな「農ある風景」だが、今後は「農あるキャンパス」への規模拡大を実現できるよう、各施設で取り組みを進めていきたい。このような学びの場から育った人材が社会で活躍するならば、今後の彼らの社会活動や家庭教育が実りあるものとなるだけでなく、食育や環境保全の分野の大いなる発展が期待できるはずである。

なお、本学を受験する高校生や在学生が自らのキャリアをイメージしやすくなるように、世界で活躍するＯＢやＯＧに大

学で講演してもらうようにした。「本学での学びが社会で活かされている」「異業種に就職しても、農学の学びを活かして活躍できている」といった話を聞くことができ、視野の広いキャリア選択のためのプログラムとなっている。こうした取り組みが、校友会や保護者の協力のもと、実施されている。このように、学生自らが地域創成や産業振興について学ぶことができ、さらには農学とは一見関わりのなさそうな企業とのコラボレーションの機会も得られるような取り組みを推進している。

加えて、本学の学生だからこそ食べるものには関心を持ってもらいたいと思う。一人ひとりが自分、家族、そして世界の人々の健康のために食をどのように考えるのかといった食育活動にも取り組んでもらいたい。そして、栄養バランスや身体を作っていく事の重要性、スリムな体型、強靭な体力と精神力、これらを培うためのノウハウを「農の力」として学んでもらえるようにしたいのである。次に、それらを強化する事によって学生の運動や勉学、社会に出てから第一線で活躍する人材となることへと繋げていく事が私の理想である。

そんな取り組みや動機づけが機能したか否かはまだ不明であるが、最古豪でもある本学陸上競技部長距離ブロック（男子）が10年ぶり70回目の箱根駅伝への出場権を獲得。また、陸上競技部長距離ブロック（女子）の全日本大学女子駅伝や富士山女子駅伝への出場、硬式野球部の明治神宮野球大会への出場、卒業生のオリンピック出場内定などの成果が得られている。そうした選手や学生から「食事を大切にします。学長！」と声をかけられることもあり、学内の食環境のさらなる充実化を急がなくてはならないとの考えがさらに膨らんでいる。

しかしながらこうした活動は、私一人で出来る事ではない。教職員のみならず、学生と協力して健康な身体や運動能力に長けた身体を作るための「食」を意識した食育、栄養教育を私は考えたいと思う。食や生活に密接な「総合農学」を教育・研究する本学がそれらを実装することが、社会で活躍する卒業生のみならず、彼らを取り巻くすべての人々の士気向上、さらには健康な日本を創成することにも繋がると考えているからだ。

本稿を執筆する機会を頂いたことに対して心からお礼申し上げる。我が国のみならず世界の「総合農学」分野の教育・研究を強化し、農林水産業とその関連業界の振興を推進することが重要であると私は考えている。

国民の一人ひとりが幅広い視野から物事を捉え、豊かな生活環境を創成していけるような大学教育を、「総合農学」の推進といった方法で取り組んでいきたい。